葛城奈海 著

『戦うことは「悪」ですか』を読んで

杉本　順則　陸自77

著者の葛城奈海氏は防人と歩む会会長でありながら、予備3等陸曹であり、予備役ブルーリボンの会幹事長として、北朝鮮向け短波放送「しおかぜ」でアナウンスを担当するジャーナリスト・俳優である。「サムライが消えた武士道の国で、いま私たちがなすべきこと」という刺激的な副題も付いている。

氏は、予備自衛官補として自衛隊に入隊し50日の訓練を受けて予備自衛官になった方であり、自衛隊員として当たり前のように見過ごしてきたようなことを新鮮な目で捉えられ、納得できる事柄が多かった。

例えば、「軍手」を「手袋」、「行軍」を「行進」と言うことに始まり、「戦闘艇」を「護衛艦」、「歩兵」を「普通科」といった類いである。戦闘機や戦車は認知されたのに、自衛隊の中に未だに無用な軍アレルギーが蔓延しているのではないかという指摘である。

また、予備自衛官補訓練の経験から「おおやけ（公）」のために「わたくし（私）」を滅して尽くす期間を成人になる条件とする提案もしている。勿論、自衛隊に限らず、警察・消防・海上保安庁、施設でのボランティアも含んでの話であるが大賛成である。

著書の中では丁寧に解説があるが、尖閣、拉致、教科書、皇統、大麻、捕鯨、どれもこれも問題の本質を辿っていくと結局「戦後体制」に行きつく。戦後アメリカ等戦勝国によって仕掛けられた時限爆弾がひたひたと威力を発揮し、日本を骨抜きにしたと看破している。「敵ながら天晴れ」と言いたくなるような見事さとまで述べている。

拉致問題に関しては「日本には男はいないのか?」何故、国民が拉致されているのに奪回しに行かないのか、それは世界の常識とかけ離れていないかとまで、危機感を述べている。

しかし、映画「鬼滅の刃　無限列車編」では「尚武の精神」の塊のような登場人物が、単なる勧善懲悪ではなく、相打ちや自己犠牲を厭わない、神のような存在であり、現代日本人の心を鷲づかみしているところに希望を感じてもいる。

9月に入り、北朝鮮が巡航ミサイル・弾道ミサイルを発射し、韓国がSLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）を発射した。中国の尖閣諸島への領海侵犯や接続水域内入域や接近も続いている。このような周辺国が存在する日本において国防に関わる方々に是非ご一読願いたい著書である。

編集委：本書は10月27日、日本の成長発展に資する書籍や論文を表彰する「第4回アパ日本再興大賞」に選ばれました。受賞について著者の葛城奈海氏は「日本再興に向けて戦えと、英霊に背中を押していただける受賞だと思っています」とコメントされています。